第４学年　国語の実践

1　単元名　「一つの花」（全８時間　本時５時間目）

2　単元目標

場面の移り変わりに注意しながら、戦時中の登場人物の気持ちや情景などについて、叙述をもとに想像して読むことができる。 文章を読んで考えたことを伝え合い、友だちの感じ方の共通点や相違点に気づくことができる。

3　「ひびき合う三の丸の子どもたち」をめざすための指導の工夫

研究課題…子どもが解決したい問題をもち、友だちとひびき合いながら学習する子どもの育成 手立て…子どもの願いや思いの育ちを見とった単元構想と授業づくり 中学年ブロックテーマ　「追究するする力、仲間と支え合う自分」 ・自分の問題をとことん追究する姿　　・仲間と協働して追究する姿

＜聴く・話すについての指導＞

当初から、「話を聞く姿勢ができるまでに時間がかかる。」「ちょっとした合間ですぐにおしゃべりが始まる。」という課題があった。そのため、大切なことを聞き逃したり、話し合いで「自分の発言を聞いてもらえない。」と感じたり、話し合いがかみ合わなかったりすることがあった。多くの子が聴いてもらえないという嫌な経験して、話を聴く必要性を感じ出した時に、子どもたちなりの「聴くルール」を考えさせた。子どもたちは、まず友だちの話を聴くことが大切で、「相手の方に顔を向ける」「反応する」「最後まで聴く」という３つにしぼって取り組み始めた。その後はこれがマナーだと感じてよく意識している。最後まで話を聴けるようになってきたことで、友だちの発言を受けて「似ている。」「賛成。」「それに対して。」という話し合いができるようになり、総合などでは、話し合いの流れが途切れないように相互指名して進められるようになってきている。

話すについては、自分の考えを表現することに対するハードルを下げるために、発表の時にはグループ内発表を多くしてきた。ひとりひとりがしっかりと発表時間を持てて、聞き手がすぐ近くにいて聴いてくれる安心感と、その場で反応してくれる満足感があり、よい経験の積み重ねになっている。

＜関わり合い・ひびき合いについて＞

自分なりの考えを持つことができるようになってきたが、全体の場で表現するのには腰が引けてしまう子が多かったり、考えがまとまらずに思ったことを発言するためにみんなにうまく伝わらなかったりする場面があり、関わり合い、ひびき合いが十分とはいえない。

そのため「聴く・話すについての指導」で挙げた指導を続けてきたところ、個々が強い気持ちを持って臨んでいる総合をきっかけに、話し合いがつながるようになった。それが社会、理科と広がり、徐々に担任が前にいなくても進んでいくことが増えている。また、道徳を中心に、それぞれの感じ方、考え方をお互いに学ぶ学習では、友だちの意見に「ああ。」と納得したり、「そうか、それならこうかも。」と友だちの考えを受けて新たに考えたりする姿も見られている。今後は話し合いの中で、「でもさあ。」「それはこうじゃないの。」など友だちと違う考えをもっと表現で

きるようにしたいと考えている。

4　単元と指導について

＜単元について＞

本単元は、「C読むこと」の（1）のウ「場面の移り変わりや情景を、叙述を元に想像しながら読むこと」、オ「読み取った内容について自分の考えをまとめ、ひとりひとりの感じ方に違いがあることに気づくこと」、カ「書かれている内容の中心や場面の様子がよく分かるように声に出して読むこと」にあたる。

物語では、ゆみ子に対する両親の想いや時代背景を象徴する言葉として「一つだけ」と表している。父母のゆみ子に対する思いを叙述から想像しながら読むと同時に、戦争中と十年後の変化を読み取っていくことで、叙述の様々な捉え方や友だちとの感じ方の違いに気づくことができる。

戦争中を扱っているため、時代背景や単語など現代の子どもたちには分かりにくい部分もあると考えられるので、適時説明しながら読むことが必要となるが、4年生の成長過程に合わせた戦争を扱った文学に触れる貴重な機会である。この段階では、戦争の悲惨さを知った上で、その時代に生きる登場人物（家族）の心情を、子を思う親の気持ちを想像することを通じて学習し、高学年につなげていきたい。

＜指導について＞

本単元の進め方として、「一つの花」を読んだ感想の中から疑問や話し合いたい場面について取り上げて行こうと考えている。「一つだけちょうだい」ばかり言うゆみ子、お父さんが高い高いをする場面、お父さんとの別れの場面、十年後が挙がると予想される。

子どもたちが話し合う中で、自然な流れでそれぞれの場面で中心となる「お母さんの想い」や「お父さんの想い」を考えていけるようにしたい。教師はポイントになる叙述に気づくための支援に留めたいと考えている。

また、１１月の子どもたちであれば理解できると考えて、「よく読めばすぐに分かること」や「単なる空想」を話し合うのではなく、「叙述を元にして想像する」ことが大切だと伝えてから学習に臨みたい。

初めの場面でゆみ子の「一つだけちょうだい」について話し合いながらも母の思いを想像した後でも、その後のお父さんの「高い高いする場面」「ゆみ子にコスモスの花をあげる場面」「何も言わずに行ってしまった場面」での行動はなぜだか分からない子が多いと考えられる。そこで本時では、「お父さんは、どうして一りんのコスモスの花をわたしたのだろう？」という問題について話し合っていく。ここでは、時代背景やこれまでの経験を生かして考える子もいるだろうが、この場面までにお母さんやお父さんの想いを考えてきているので、そこを踏まえて考え、叙述を元にして想像していってほしいと期待している。初めは、「お父さんは優しいから。」「きれいな花だったから。」などの意見も出てくるだろうが、「このコスモスがお父さんだと思って大事にしてほしい。」「コスモスは一つしかない命を表しているんだよ。」「命だけじゃなくて、ゆみ子の幸せもじゃない？」などコスモスが象徴していることを考えられるような、お父さんが一りんのコスモスに込めた想いを考え、話し合いによって考えが変わったり新たな考えが生まれたりする姿をひびき合いの姿としたい。そして、学習中に発言はできなかった子でも、ノートに書いた自分の考えが初めと学習後で変化しているかどうかでも見とっていきたい。

5.単元構想　4年　国語「一つの花」（全9時間）

単元目標
○場面の移り変わりに注意しながら、戦時中の登場人物の気持ちや情景などについて、叙述をもとに想像して読むことができる。
○文章を読んで考えたことを伝え合い、友だちの感じ方の共通点や相違点に気づくことができる。

・自分の問題をとことん追究する姿
・仲間と協働して追究する姿

本単元まで
読書週間の読み聞かせ
「ちいちゃんのかげおくり」
・かわいそう。死んじゃったってことだよね。戦争って嫌。
学活「広島ベスト5」
「ヒロシマ」について・原爆について、担任の広島での経験、三輪車を埋めた親の思い
道徳
「お母さんのせいきゅう書」
・お母さんの願いた・いい子どもになってほしかった・お母さんは気づいてほしかった

「一つの花」はどんなお話だろう　①②

この時代の言葉・時代背景の確認をしながら読む
防空頭巾・配給・戦争
お米は貴重・おやつなどない。食べ物も不足

印象に残った言葉や行動・場面　・やったー・知ってる・もう戦争はやめてほしい
一つだけちょうだい・食いしんぼう・ゆみ子はわがままだ
・お父さんのおにぎりなのに・お母さんはどうしてあげてしまうの
この子は、一生みんなちょうだいと…・どういう意味？・心配・切ない
・めちゃくちゃに高い高いするお父さん。どうして？・あやしている・安心する
コスモスをあげた場面　・さあ、一つだけあげよう。大事にするんだよう。
・なぜコスモスをわたしたのだろう？　ゆみ子はうれしいの？・やさしいお父さん
・どうして何も言わず行ってしまったの？・何でゆみ子を見つめないの？・心の中で泣いている。
十年後の場面　・お父さんは死んでしまった・ゆみ子はお父さんを忘れちゃっているの？
・ゆみ子は頑張って生きている・「一つだけちょうだい」はなおったの？
・花畑ーお父さんのコスモス？・お父さんの目印？

教材に興味を持ち、物語を読もうとしている【関心】

違いを明確につける
・読めばすぐに分かること
・読んで、想像しなければならないこと
・単なる空想

ゆみ子はわがままなのかな　②＋0.5

・ゆみ子はわがままだ。ものがないのに・戦争中でものがないんだから我慢しなきゃ。
・お母さんの分がなくなってしまう。・お父さんのおにぎりまで食べてしまう。
・食いしん坊だからおなかが減っているから。・まだ小さいから我慢できないんだよ。
・おやつだってないんだから、本当におなかが減ったんじゃない
・でもお母さんは何でもあげすぎじゃない
・一つで我慢してねってことじゃないかな・本当にこれしか無いってことじゃないか
・ゆみ子にあげる物がないからじゃない
・何もしてあげられない。せめて一つあげたい気持ち。
・ゆみ子が笑顔になってほしいんじゃない・少しでも家族が笑顔でいてほしいとか

おやつどころではなく、おいも・豆・カボチャしかない。「じゃあね、一つだけよ。」というお母さんの口癖などを根拠として注目させていく。
ゆみ子についての話し合いから母の思いをかんじとれるようにしていく

叙述を根拠にしながら、登場人物の気持ちを想像しながら読むことができる【読む】

お父さんは、どうしてゆみ子をめちゃくちゃに高い高いするのだろう。　④+0.5

必要に応じて戦時中の世の中や物的な状況を教える。
配給、食糧事情、徴兵制について、不利な戦況、兵士不足、軍国一致の雰囲気など

・何でこの話をしたときに高い高いをするのか分からないよ。
・ゆみ子を楽しませるため・ゆみ子と遊ぶのが楽しい
・将来どんな子になってくれるかわくわくしている。
・でもその前にため息ついてるじゃん・すごく暗い話をしているし。
・ゆみ子に暗い話を気づかれたくないから？
・ゆみ子の将来を心配しているんだよ。
・こうすると心配が少し楽になるんじゃないか。嫌なことが忘れられるとか
・ゆみ子がちょうだいちょうだいを忘れるように
・こうやって笑顔でいられるといいなという願い・「悪いことは飛んで行け。」という気持ち
・この子の将来が幸せでありますように・ちょうだいと言わないで済む時代になってほしい
・お父さんが今できることをしている。これくらいしかできない。
・高い高いならたくさんしてあげられるからじゃない？

お父さんの悩んだ姿と「この子は一生、みんなちょうだい、山ほどちょうだい…知らずにすごすかもしれないね…みんな一つだけ。一つだけの喜び。いや、ひとつだってもらえないかもしれない。一体大きくなってどんな子に育つだろう。」という言葉から想像していく。

会話や指導を根拠にしながら、お父さんの想いを想像して読むことができる【読む】

お父さんは、どうして一りんのコスモスの花をわたしたのだろう。　⑤（本時）+0.5

何かあげたい
・きれいな花だったからじゃない。
・本当はおにぎりをあげたかったんだ。
・これくらいしかあげられないから。

ゆみ子の笑顔
・ゆみ子の笑顔を覚えておきたい。
・泣かせたくないから。
・ゆみ子を見たら自分も泣いてしまう。

コスモス
・この花を増やしておくれ
・大切に育ててほしいと思って
・戦争の後の自分の家の目印として

「プラットホームのはしっぽのゴミ箱で捨のような所に、わすれさられたようにさいていた」という描写
「一つだけのお花、大事にするんだよう…」というお父さんの言葉
何も言わずに行ってしまった行動
これらからコスモスの意味を考えられるようにする。

お父さんの代わり
・戦争で死んでしまうかもしれないから。
・もう会えないかもしれないから。
・この花をお父さんだと思ってね。
・形見だと思う。
・ゆみ子のことを見守っているよ。

一輪の花の意味
・気持ちがつまっているんだよ。
・一つだけの命
・一つだけの幸せ
・一つだけの喜び
・余してあげられる一つのこと。
・一つだけがたくさんになるように願ってるとか

一輪の花が象徴しているもの
・花に思いを込めている。意味があるんだよ。
・ゆみ子の幸せを表しているんじゃない？
・「忘れられたように」でも残っていた。この花のように生き残ってくれということ。
・これが最後の一つだけだよという気持ち

ゆみ子は十年後、どうなったのだろう。　⑥+0.5

叙述やこれまでの読解を根拠にしながら、ゆみ子の生活の変化を想像しながら読むことができる【読む】

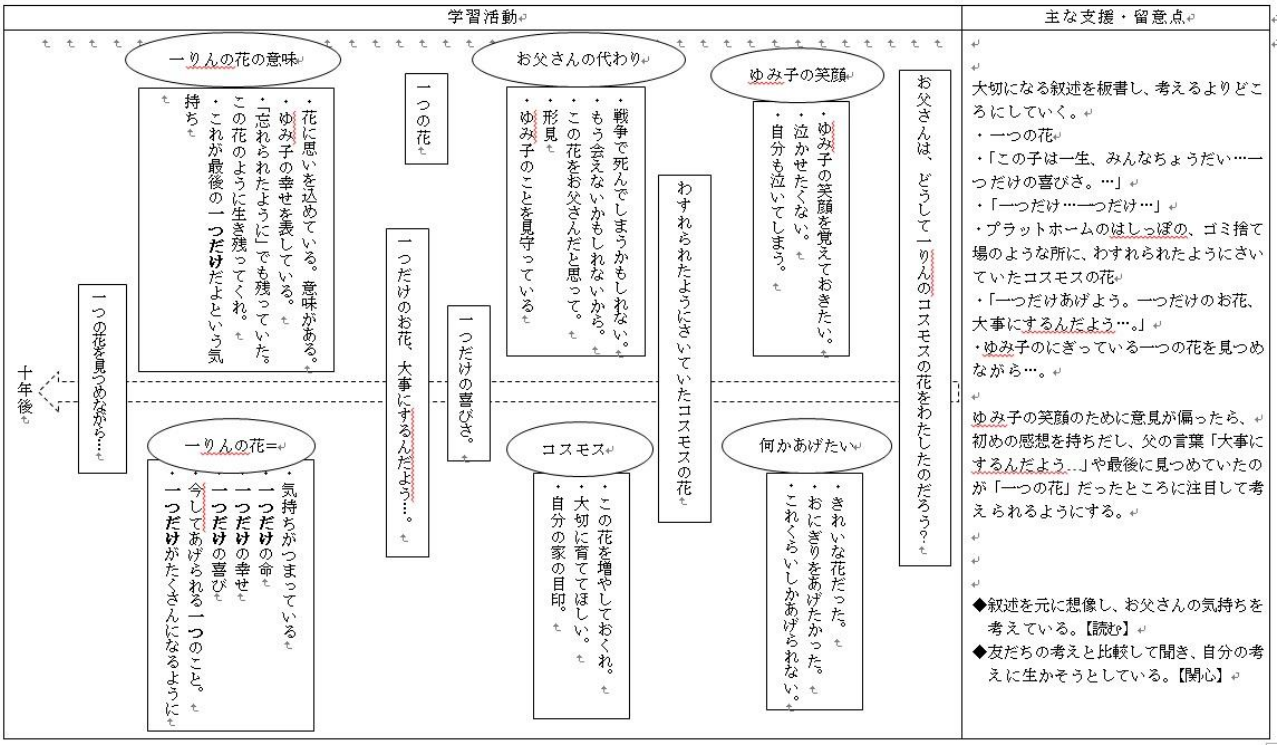
・戦争が終わってよかったと思っているよ・平和になっている。
・ゆみ子もお母さんも生き残っているし。
・買い物に行かれたり、お肉と米も食べられる・一つだけじゃないってこと。
・コスモスは、お父さんがくれたコスモスだよ。それが増えたんだと思う。
・新しく種を植えて増やしたんでしょう・お母さんが植えたんじゃない？
・でもお父さんはいないから死んでしまった
・ゆみ子はお父さんのことを忘れてしまっている。それはかわいそう。
・コスモスがお父さんの代わりなら、見守っていることになる。

叙述のみを根拠にして想像することは難しいと思われるので、これまでの読解を踏まえて考えられるようにする。想像の幅もある程度広く考えてよい。

6．本時について

（1）本時目標　お父さんがゆみ子にわたした「一輪のコスモスの花」について話し合うことで、父のゆみ子に対する想いを読み取ることができる。

（2）本時展開



7　実践を終えて

＜単元に入るまで＞

今回、資料編の「一つの花」を扱うにあたって、子どもたちの学習を難しくすると考えられる点がいくつかあったため、事前の準備を丹念に行ってから学習に入った。

一つは、子どもたちはこれまでに国語で戦争に関わる作品を学習したことがない。そのため、「一つの花」の前段階とも言える作品に触れさせた。少し前に読書週間があったので、先生の読み聞かせとして、「ちいちゃんのかげおくり」を読んで聞かせた。「ちいちゃん死んじゃったってことだよね。」「かわいそう。」「戦争ってひどい。」などのつぶやきが聞こえてきた。

もう一点、子どもたちにとって親の気持ちを想像するというのは非常に難しいことだと考えられるため、１ヶ月ほど前に「家族への感謝」の作文で家族が自分に当たり前のようにしてくれていることを思い起こす時間を作った。また、少し前の道徳「お母さんの請求書」では、ぼくの気持ちの移り変わりを考えるだけでなく、お母さんの想いについても考える機会にした。

そして、「一つの花」の学習直前に、担任が住んでいたことがある広島の話をした。映像を見せながら、戦争、原爆の話や資料館に展示されている三輪車に込められた親の思いなどについて伝えた。これらの環境を整えた上で学習に入った。

＜学習を進める中で＞

単元に入る前の環境作りのおかげで、戦争中の世の中の状況、決して明るくない雰囲気、貧しさなどを理解した上で物語を読むことができた。そして、初発の感想から多くの子が疑問に感じた場面やみんなで話し合いたい場面を扱っていくことになった。毎回、自分の想像や考えを持ってから学習に臨むようにしたが、やはりゆみ子のことを想像するよりもお父さんのことを想像することの方が難しかった。それでもひとりひとり「こういう状況だから」「自分だったら」とよく考えることができていた。そして毎時間の最後には今の自分の考えを書くようにした。友だちとの話し合いを通して自分の考えが変わることの大切さを伝えてきたことで、「初めはこう思ってい

たけれど､やっぱりこうだと思うようになった｡」「〇〇さんが言っていたように､私もこう思う｡」などの文章が多く書かれ、学習の中で友だちと意見交流して、自分の考えが変わることに価値を見いだすことができてきた。

＜成果と課題＞

最も大きな成果は、子どもたちがそれぞれの考えを発表するだけでなく、しっかりと友だちの発言を受けてさらに考え、その時々に中心になっている話題について話し合っていく姿が見られるようになったところにある。本単元でも､「お父さんはこう思ってたんじゃないかな｡」「私もそう思う｡」「でもそれって…」「私はちょっと違って…」というように､「でも」という立ち止まりや反対意見が出てくる話し合いができていた。そして子どもたちが自分たちでどんどん話し合いを進められるようになった。これは年度当初から子どもたちに望んでいた姿だった。

上記のように、子どもたちがひびき合い、仲間と協働する姿が目立った一方で、本単元では、自分の問題をとことん追究するという点で課題が残った。初発の感想を元にして、疑問や話し合いたい場面について深め合っていったが､話が進むにつれて､ゆみ子､お母さん､お父さんと徐々に気持ちを想像するのが難しくなっていったこともあり、問題に対する意識や切実感が薄れてしまうことがあった。

このような課題に対して、教師が必要な場面で出ていくことになるのだが、その出所のタイミングが遅かったり､逸してしまったりしていた｡そこには教師自身の教材研究の不足が否めない。教材を自分なりに解釈した上で、いくつかの文献を読んだのだが、研究者によって様々な解釈の違いに出会ってしまい、返って迷いが生じてしまった。本来ならそこを乗り越えて、子どもたちに読み取ってほしいことをより明確に持って授業に臨まなければいけなかった。そうすれば、子どもたちがより自分たちの問題として意欲的に考えるための手立てが打てたのだろうと痛感している。